

ちてとく都に登り給へとすゝめければ、法師は主のいと厚き志を喜び、打戴き懐にして立別れぬ。都にとゞまる事五十日許、願をとげてぞ歸りける。斯くて髮結の主の厚き情を思ひ訪ひけるに、五十日許さきに俄に病おこりて歿しぬと。法師打驚き歎けども甲斐なし。ゆかりの人やあると尋ぬるに、獨りの女子あり。父なくなりし後は、近きわたりしるべの人にすがり日を過しぬといふ。法師思へらく、せめてその女子を我が子となし養育せんと、娘を得て歸りけるに、二年許にして法師もまたはかなくなりけり。其の所に小幡式部といふ醫師あり。心清き人なり。殊に法師といとうるはしき友なりしかば、彼の女子をいたはる餘り遂に我が子となしぬ。此の人貧しきに堪へず、弟をば僧となし、能登國森山安養寺にぞ住みける。式部女子を携へつゝ安養寺に來て止る事久し。天正の頃、國守利家卿巡りし給ひ、徳田村の紙屋某方に宿り給へり。かの女子人となり常ならず、またうるはしければ、彼の御宿にゆきて御湯殿のわざなど仕りぬ。國守いたくめでさせ給ひ召仕はれしに、御子をうみにけり。その御子猿千代君と御名を負はせ

給ひて、二代の君利長卿の御子となし給ひぬ。御生母をば後に壽福院殿となん申しけり。妙成寺にしかくのゆかりあれば、此の寺をいたく尊信し給ふまゝに、後には此所にぞ葬り奉る。御墓瀧谷の山内にあり。小幡式部もおもき身がらになされつゝ、後は今にさかえたり。こもまた後に瀧谷にぞ葬りしにや。御生母の御墓のかたへに小幡式部の墓ありけりと云々。今按ずるに、寛文七年小幡不入由緒書に、小幡不入父九兵衛は、越中國新川郡松倉城主権名右衛門大夫の家老神崎和泉之男也。同家老小幡九助爲養子。不入母は越前朝倉氏家人山崎右京娘。とあり。されば此の母初め上木新兵衛に嫁し、壽福院殿を生み、後此の女子を連れ子にして小幡九兵衛に再嫁せしと聞ゆ。三州志雜書餘考にも、壽福院殿の實父は上木新兵衛なり。母は山崎右京女也。右京は朝倉義景麾下越前新庄に住す。上木死後壽福院子を引連れ、小幡少兵衛に再嫁す。三壺記及び青地が系譜等の説は是と異なり。といへり。青地禮幹の本藩略譜に云ふ。微妙公生母上木氏新兵衛某女、小幡宮内長次異父姉也。其母再嫁小幡九兵衛。因冒姓小幡氏。寛永八年辛未三月六日

卒。號壽福院。といへり。

○壽福院殿墳墓

經王寺の後。地にて、老松數株生ひたり。もとは經王寺の境内なりしかど、廢藩後境外とす。三壺記に云ふ。寛永八年三月六日に壽福院殿御遠行被成ければ、江戸にて御遺骨を奥寺町へ移され、日蓮宗の寺にて葬り奉り、池上に御墓所を造營被成。加州へ早飛脚到來する處、天徳院殿の例にて任せ、小立野にて御葬禮執行、則ち經王寺の和尚導師にて其の規式善美を盡し相濟みけり。然るに同年四月十四日壽福院殿の御葬送灰塚も未だ納らず、番人を付けて置かれける處、大風吹きて犀川橋爪法船寺の門前町より出火云々。とあり。延寶二年經王寺由來書にも、寛永八年三月六日於江戸壽福院様御死去被成、江戸池上に於て火葬に被爲成、御遺骨金澤に御迎被成、四月六日に於當寺御葬禮御座候。則御法事之用意有之處に、其節當地大火事に付、當寺も燒失、假屋之躰に而罷在候へ共、壽福院殿七年忌之御法事被仰付、中納言様御參詣被成、御燒香被遊。と載せたり。三州志の一説には、遺骨の靈輦金澤に來らんとするに

より、經王寺にて葬禮の備へを設けて相待つゝの處、四月十四日の火災に經王寺燒失す。因つて假堂を作つて葬儀をなすと云ふ。經王寺へ納むる者は、壽福院君の父上木氏の香華院なるを以て也といへり。平次按ずるに、壽福院君の葬禮は四月六日なり。金澤火災は四月十四日なり。されば三壺記に載せたる如く葬送後の火災にてあれば、彼の一説に燒失後假堂を作り葬儀をなすといふは、後人の過聞なるべし。

○上野村跡

上野新村元山廻の傳説に云ふ。昔山崎村の村地追々町地と成るに付、山崎の村落も絶えて、村地の残りをば山崎領と呼べり。其の百姓は經王寺前へ移住し、僅に家屋を建つといへども、經王寺を建立し給ひ、壽福院殿毎度御參詣ある道路に村家ありて見苦しく、御目障りに成る由にて、重ねて小立野の端今の上野村の地へ移轉を命ぜられ、邑名も上野村と改稱すといへり。按ずるに、上野村後に上野新村と改稱あり。山崎領は後に笠舞村へ付きたり。

○小立野町